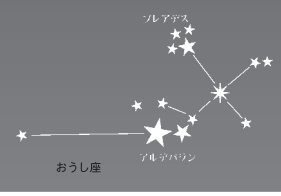
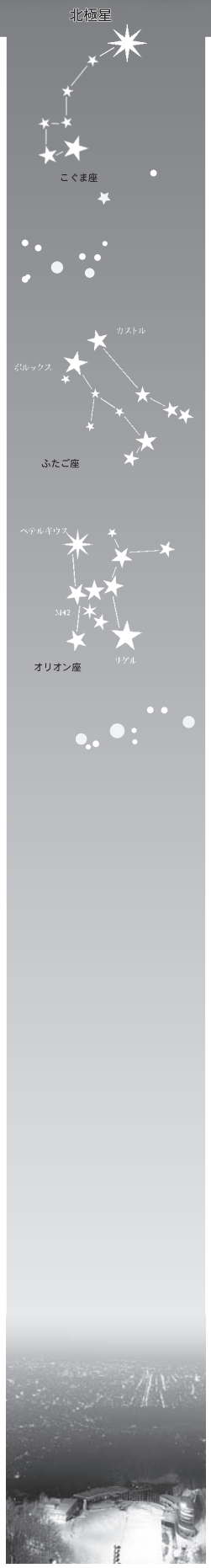


－医師会長エッセイ－

ポラリスを仰ぐ北の大地から



国後島を訪問して

根室市外三郡医師会　会長　杉木　博幸

北方四島交流訪問団の随行医師として、昨年８月に国後島を訪問する機会を得た。訪問団は45名、ほとんどが元島民子孫の大学生である。期間中は天気に恵まれ、航海も順調であった。海上ではイルカが観察でき、歯舞諸島や雄大な国後島の山々を見ながら古釜布沖に到着した。緊張感みなぎる国境警備隊の審査を経て、はしけ船で上陸。港に出迎えてくれたロシア人島民の乗用車に分乗し、宿泊施設である「友好の家」へ。

乗用車は中古の日本製ミニバン、右ハンドルであるが、車は右側通行である。大部分が未舗装で、街のあちこちで乗用車が砂埃を立ち上げていた。滞在した「友好の家」は、過去「ムネオハウス」として大きく取り上げられたが、プレハブ二階建ての質素な造りである。現在では四島交流訪問事業で訪れる日本人だけでなく、島外ロシア人の宿泊所としても活用され、無くてはならない施設となっている。

ロシア人職員は非常に勤勉かつ友好的で、三度の食事を遅滞なく提供してくれた。古釜布は木造の集合アパートが多く、日本の昭和初期を彷彿させる。明らかにインフラ整備が立ち遅れているが、ロシア政府によるクリル諸島社会経済発展計画により、地熱発電所などライフラインの整備だけでなく、学校や公園、図書館や文化会館、教会に至るまで近年新築整備された。今後もさまざまな施設が建築されるという。

病院訪問は叶わなかったが、根室市の二倍以上の出生率があるという。確かにどの公園も多くの子どもたちが遊び、夕暮れまで歓声が響き渡っている。少子高齢化の日本ではみられない光景だ。

人口増加策がとられ島生まれのロシア人が年々増加している現実を見るに、もうこの島が日本に帰ってくることはないかのように思われた。

ロシアの医療
－ユジノサハリンスクから－

北海道大学医師会　会長　寳金　清博

仕事で、二度目のロシア訪問、ユジノサハリンスクである。多くの現場を訪問した。日本とロシアの「医療」は驚くほど異なる。いずれも皆保険であるが、ロシアの基本的医療は無料である。また、医師数は人口比においてもロシアの方が２倍程度あり、かつ、圧倒的に女性医師の比率（65%）が高い。

「地区内科医」「総合医」と言う日本の「かかりつけ医師」に相当する制度が社会に浸透している。医師の給与は低く、当然、医師の経済的地位、社会的地位は必ずしも高くない。ロシアの子どもたちの「憧れの職業」は、軍人、プロスポーツ選手などであり、医師はトップ10に入らない。また、このことと関連するかもしれないが、医学レベルはご存知のように、平均値で見れば、決して高くない。いずれも、ソビエト連邦時代の制度設計の名残と見ることもできる。

医療提供をどのように考えるかという問題は、国の基本的な問題である。突き詰めると公共政策における自由と平等という「正義」の問題にかかわらざるを得ない。資本主義の競争原理の中に医療制度を置こうとすると、アメリカ合衆国の医療制度に近いものとなる。一方で、医療を平等に人々に提供する立場を徹底すれば、マルクス・レーニン主義が提唱した制度を考えざるを得ない。また、医療制度をどのように設計するかは、単純に資本主義とマルクス主義の間での選択だけではなく、その国の文化・歴史・死生観にかかわる問題であり、かつ、現在は、どの国においても、国の財政の根幹にかかわる問題である。

北海道よりさらに北の隣国、ロシアにも、似て非なる医療制度が存在する。また、世界各国を見ると、日本の医療の常識とは異なる医療の常識が存在する。

現在、国立大学病院の国際化担当者として、世界各国を訪問し、医療制度を見るたび、日本の医療が極めて特殊な形態を成していることを痛感する。